

外科通論

明佐藤進講義
筆記
二十



定價二十錢

佐藤進講義
門人筆記

外科通論

明治十二年五月
廿二日版權免許

佐藤尚中藏版

外科通論卷之二十

佐藤進講義
門人筆記

第四十五章

纖維腫 軟性纖維腫 ○顯症 ○療法

○脂肪腫 ○解剖上検査 ○症狀及經過

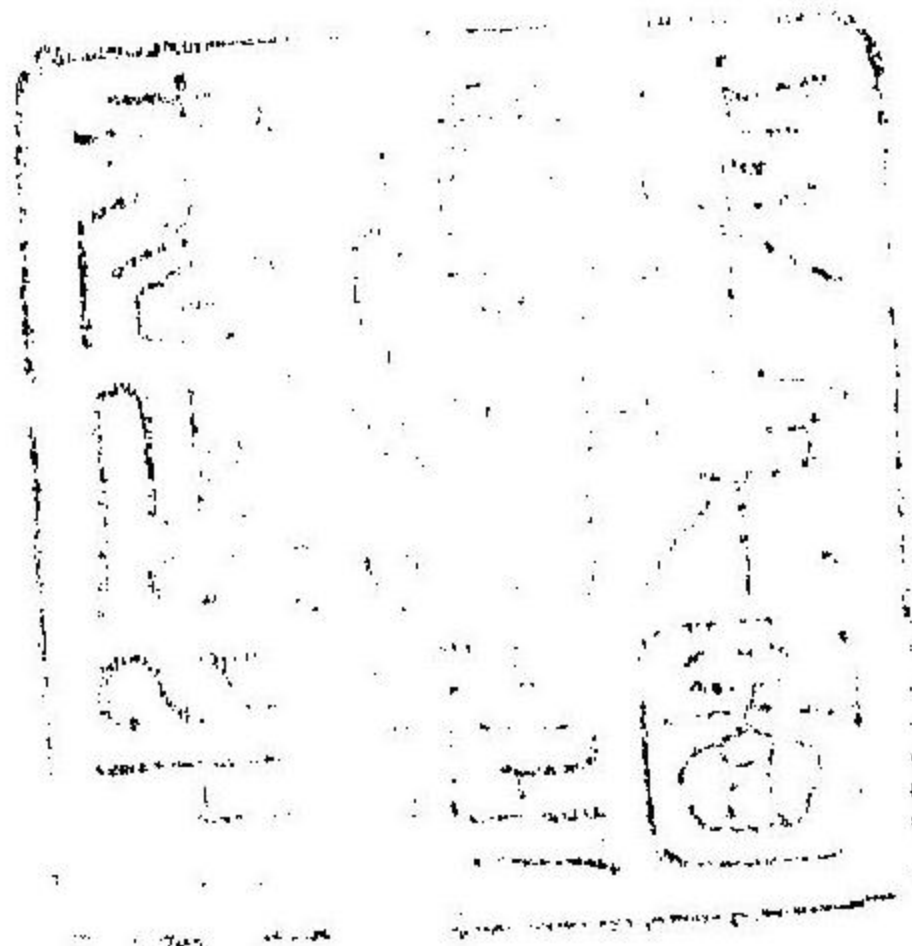
○軟骨腫 ○症狀 ○療法 ○骨腫 ○症狀

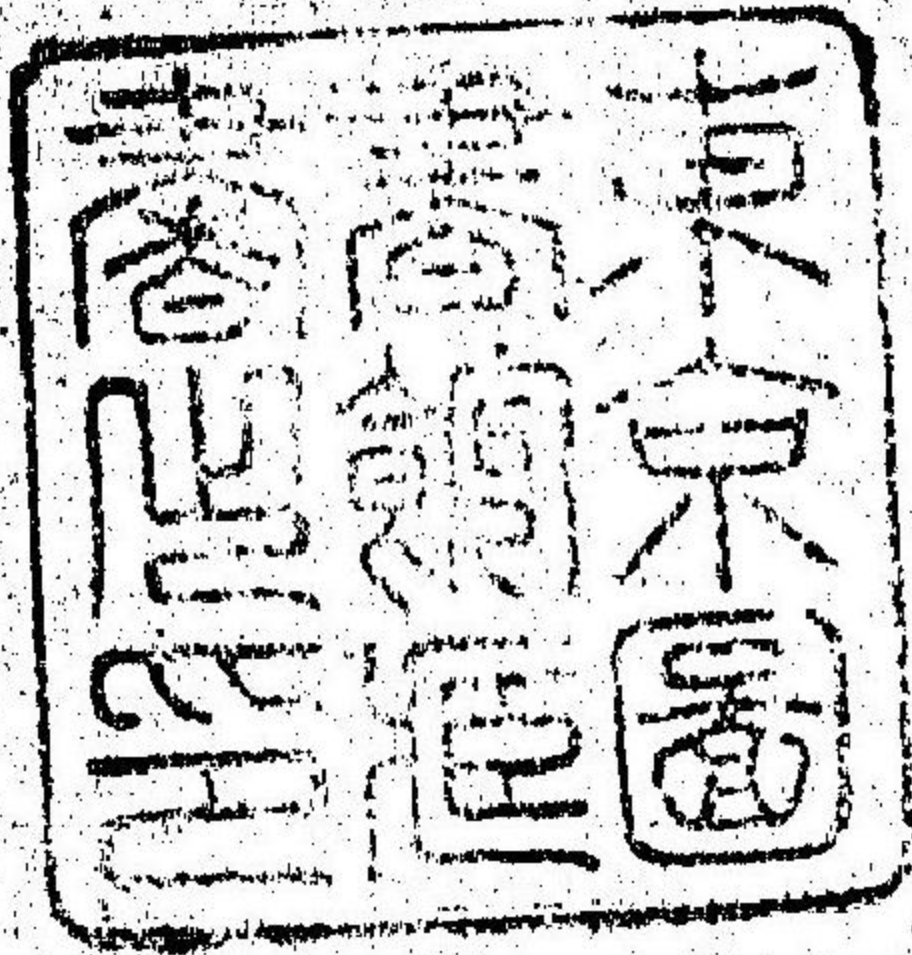
○療法

甲纖維腫 一名結核

Hyphomycosis

主トシテ 結組織纖維ヨリ構成セラル、者總テ





外科通論卷之二十

佐藤進講義
門人 筆記

第四十五章

纖維腫 軟性纖維腫 ○顯症 ○療法

○脂肪腫 ○解剖上検査 ○症狀及經過

○軟骨腫 ○症狀 ○療法 ○骨腫 ○症狀

○療法

甲 纖維腫 一名結核性纖維腫 *fibroma*

主トシテ 結組織纖維ヨリ構成セラル、者總テ

外科通論 卷之二十 頁六

之ヲ纖維腫ト名ク左ニ其種類ヲ區別ス

イ軟性纖維腫 該腫ハ贅腫中多發スル症ニ屬

ス而シテ其發生部ハ常ニ外皮ニアリ其構造ハ
稍浮腫狀ヲ成シタル白キ柔軟組織ニシテ往々
薄キ外皮ノ乳嘴層ニ由テ掩ハル、ト少ナカラ
ス顯微鏡ニ由テ之ヲ檢スルハ外皮ノ如キ鬆
疎ノ質ヨリ成ル而シテ腫ノ表面ニハ每常尖リ
タル乳嘴ヲ見ル加之外皮ノ乳嘴ヲ具ヘサル部
ニ生スルハ亦乳嘴體ヲ見ルモノナリ又マル
ヒキ層中ニ生スルハ褐色ノ色素ヲ具スル

少ナカラス其他該腫中ニ血管ノ發育著シク或
ハ其表面ニ非常ニ毛腺及ヒ脂腺ノ増大スル者
ヲ見ルトアリ

軟性纖維腫ハ通常弛緩シ且ツ時トシテ著シク
莖ヲ具フル贅腫ナリ而シテ元來外皮ノ原質ヨ
リ成ルモノナルカ故ニ人之ヲ局處性ノ皮膚成
形過多症ト見做スモノアリ抑モ該腫ノ發生ス
ルヤ甚タ慢徐ナリ之ニ由テ常ニ疼痛ヲ生スル
トナシ故ニ時トシテ非常ニ増大スルニ至ルト
アリ又時トシテ先天ナルトアリ而シテ同時ニ

數多ヲ生スルト少ナカラス加之體中同腫ヲ生
スル百ヲ以テ數フルニ至ル者アリ先天ニ最モ
多ク外皮ニ非常ノ成形過多纖維ヲ生スル部ヲ
面部トナス但シ多クハ半面ナリ或ハ廣ク蔓延
シ或ハ雞冠狀ニ發生スルモノアリ其他肝色斑
毛髮及ヒ色素ヲ有スル母斑即チ良性メ之ニ屬
ス該腫ハ多ク三四十ノ年紀ニ生シ易シ女子ニ
アリテハ大唇ニ生スルト少ナカラス即チ瓣狀
ヲ成シテ延長ス而シテ非常ニ增大スルニ至ル
人ノ嫌疑スル局部ナルヲ以テ之ヲ秘スルカ故
ニ施行ヲ加フル時期ニ非常ノ增大ヲ為スモノ

リウルシヨウ氏ハ此ノ如キ柔軟ノ纖維腫ヲ簇
發スルモノヲ獅子面癩ト稱ス多ク顔面ニ生シ
ル患者ノ顔貌獅子ニ類スルヲ以テ經過中時トシ
テナリ古名ニシテ穩妥ヲ得ス
テ全身ノ給養障礙ヲ將來スルトアリ而シテ通
常傳播性ノ贅腫ニ屬セスト雖時トシテ之ニ罹
ル患者ニ血液調和不良ヲ呈シ且ツ年ヲ經ルハ
ハ患者瘦削ニ由テ斃ル、トアリ人夫ノアラビ
ア癩ナルモノ、真相ヲシテ結節狀ヲナシ且ツ
同時ニ一局部ノ真皮ノ蔓延性肥大陰囊或ハ下
ルヲ成ス者ト做スト雖解剖的構成ニ至リテハ

此ニ論スル纖維腫ニ甚ク類似ス而シテ人只單ニ之ヲ皮膚ノ肥大即チ厚皮ト認ムルニ至リテハ大ニ誤謬タルヲ免カレス其他モハシナリススレヨムギリシヤ癩邦本ニ多ク見ルハ皮膚ノ肥厚ニ類スト雖病性ニ至リテハ自ラ別アリ即チ風土病ナリ而シテ諸般ノ神經症知覺過敏ヲ合併スル全身症ニシテ痺精神錯亂ギリシヤ國小亞細亞、バルウーゲン、支那、日本等ノ諸國ニ多發スル症ナリ荏苒該症ニ罹ルルハ遂ニ死ニ陥キルモノトス

口硬性纖維腫

ヒプロロイデスモイデス

該腫ヲ肉眼ニテ

檢スルルハ纖維ノ緻

密ニ排列スルモノヨ

リ成ル故ニ其性質常

ニ硬固其形圓クシテ

結節狀ヲ成シ其切斷

面ヲ檢スルルハ其色

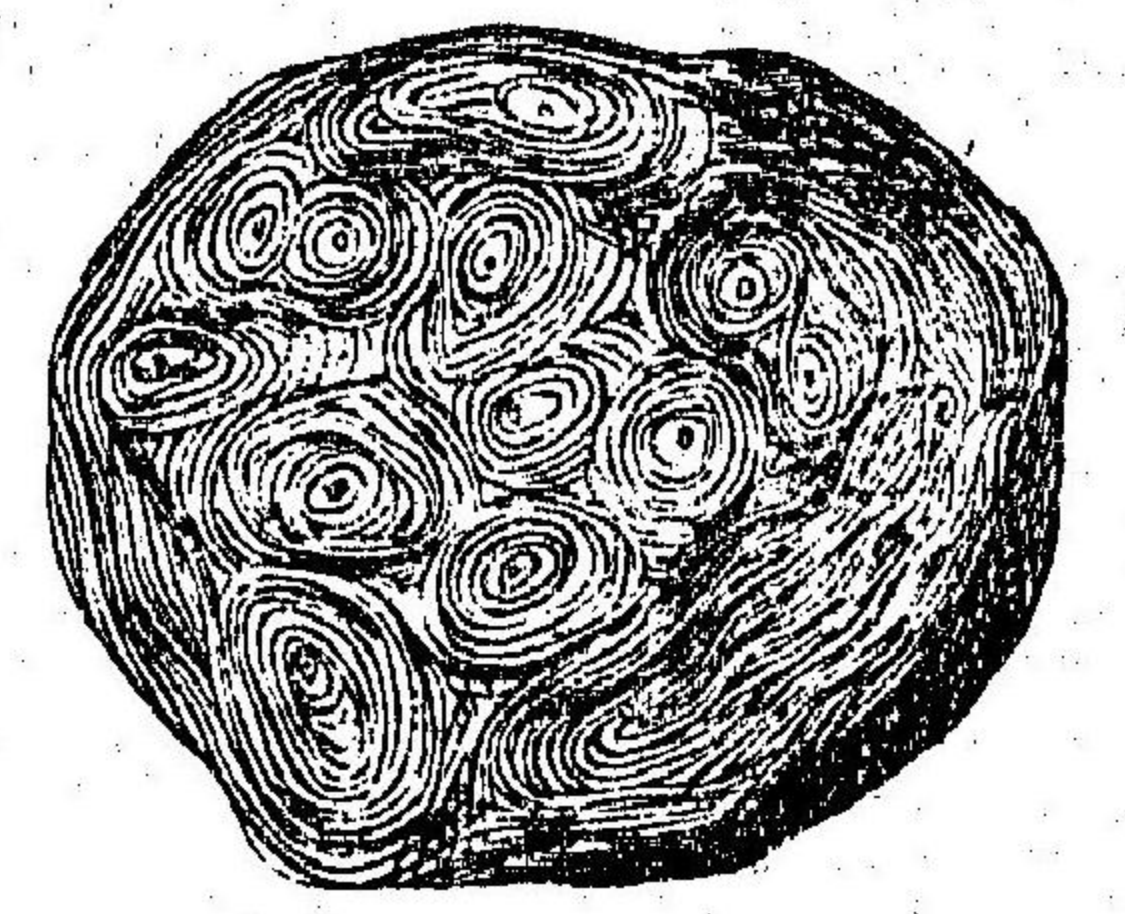
白ク或ハ淺紅ナリ又

時トシテ正シク纖維

ノ重層ヲ成シテ渦狀

ニ各箇ノ軸ヲ繞圍ス

第七十一圖



子宮ニ生セシ小ナル纖維腫ヲ剖斷シテ其面ヲ示ス其大サ真物ニ同シ

ルヲ見ルトアリ此ノ如ク纖維ノ繞圍スル軸即
 チ中心ハ蓋シ神經或ハ血管ナリ此中心ニ存ス
 ル神經及ヒ血管ハ時トシテ消亡スルトアリ
 纖維腫ハ之ヲ組織學上ニ論スルキハ時トシテ
 之ヲ纖維腫ニ歸スヘキカ將タ他ノ贅腫ニ歸ス
 ヘキカ之ヲ判別スルニ困難ナルトアリ然レモ
 贅腫ヲ構成スル組織中著シク纖維ノ居多ナル
 トヲ知ルトキハ固ヨリ之ヲ鑑別スルト困難ナ
 ラス即チ之ヲ單純ノ纖維腫トナスヘシ例之子
 宮ニ生スル歳ヲ經シ纖維腫ノ如シ然レモ新生

ノ者ニアリテハ縱
 令子宮ニ生シテ其
 形狀及性質等ニ至
 ルマテ單純ノ者ニ
 異ナラスト雖之ヲ
 精密ニ檢スルキハ
 自ラ異ナル所アル
 ナリ新生ノ者ハ結
 組織ノ量亦少ニシ
 テ却テ紡績狀ノ細



子宮ニ生セシ筋性纖維
 腫其大サ三百五十倍ナ
 リ筋胞結束ノ縱横兩斷
 面ヲ示ス

第七十二圖

胞ヲ多ク發見スルモノナリ此紡績狀細胞ニ就テ學者各其所見ヲ異ニス「ウィルシヨウ」氏ハ之ヲ筋纖維胞ト為スカ故ニ通常子宮纖維腫ト名クヘキ者ヲ筋腫トナシ或ハ之ヲ筋性纖維腫ト名クル者アリ又此筋纖維胞ヲシテ之ヲ未熟ノ紡績狀細胞肉腫或ハ纖維性肉腫ト名ツクヘシ

纖維腫ハ諸般ノ變質ヲ見ハス殊ニ限局性粘液性軟化、沕乙性浸淫及石灰等ノ變質ヲ見ハスモノナリ又化骨スルヲ少ナカラス時トシテ纖維

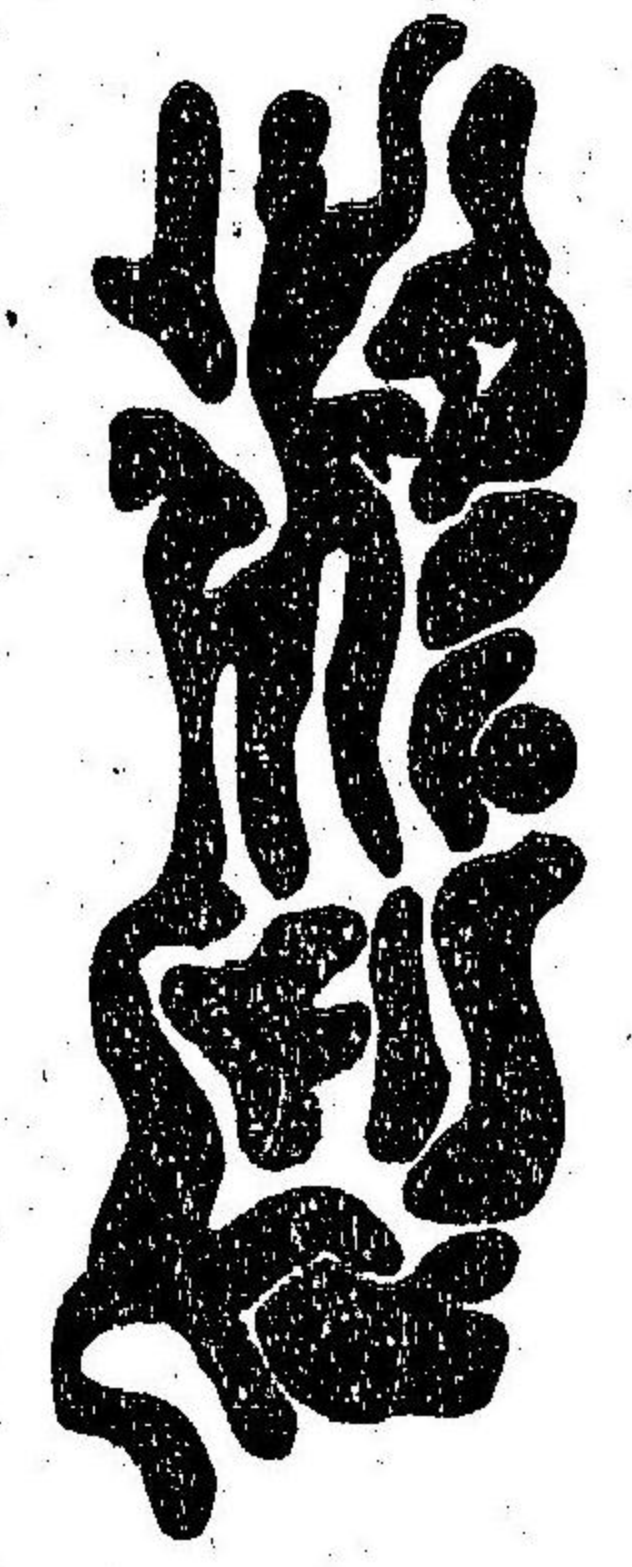
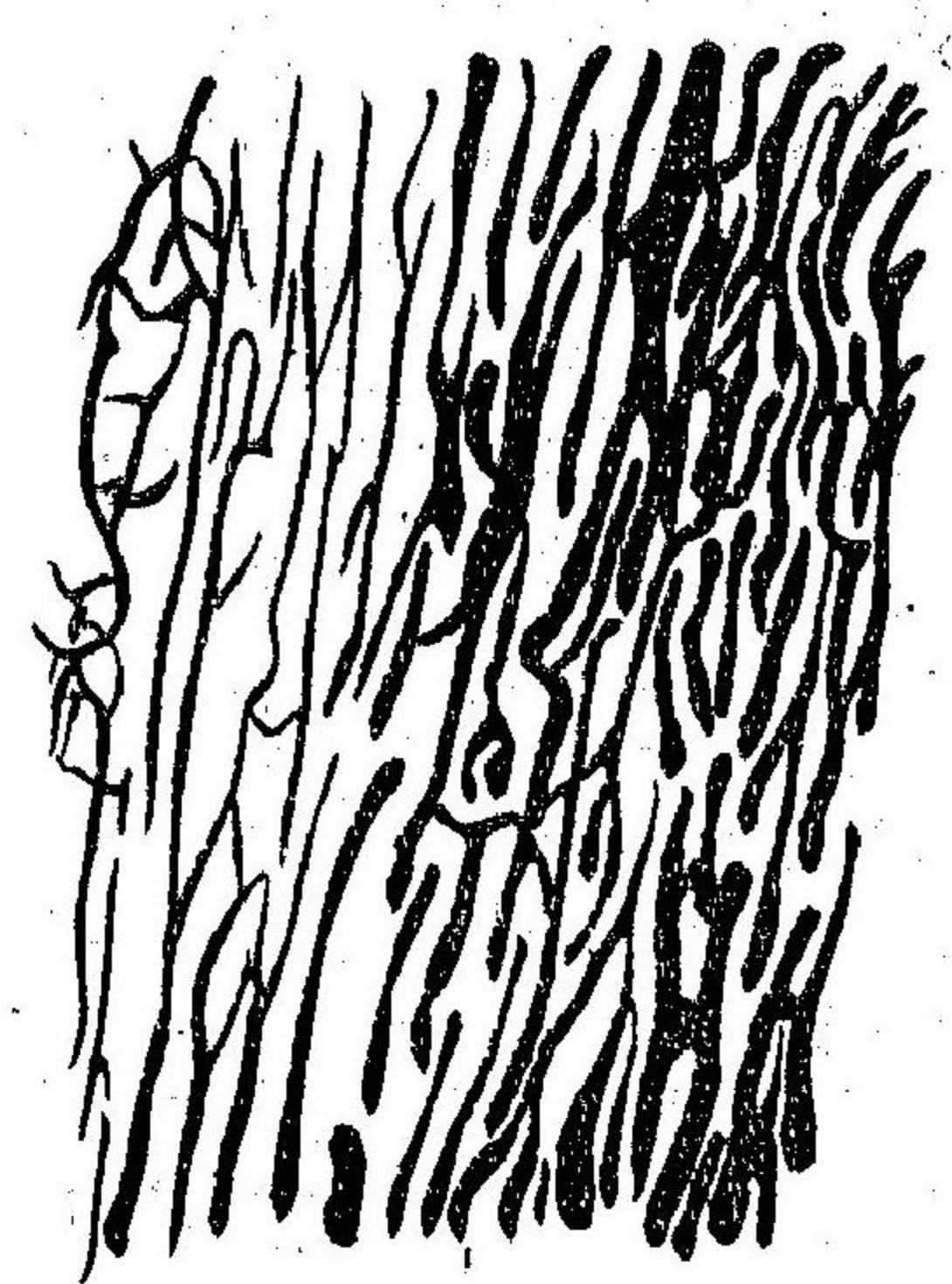
維腫ノ表面ニ潰瘍ヲ生スルヲモ亦少ナカラス是レ多クハ粘膜炎ニ生スル者ニ多シ其初メ粘膜炎ノ表面ニ外来ノ刺戟ヲ受クルヲ以テ誘因トナス此ノ如キ潰瘍ハ良性ノ肉芽及化膿ヲ呈シ又良幸ナル者ハ癍痕ヲ結フニ至ルヲ少ナカラス纖維腫ノ組織ハ其外觀血管ニ乏シキカ如シト雖術ヲ以テ試ニ色料ヲ射入スルキハ無數ノ動脈及ヒ靜脈ヲ具フルヲ證スヘシ而シテ此ノ如キ脈管ハ纖維腫ノ組織ト密ニ合着スルモノナリ故ニ外膜ハ其本質ヲ纖維腫ノ組織中ニ失

第七十三圖

イ 大腿ノ皮膚ニ生セ
シ纖維腫ノ動脈ニ
色料ヲ注入セシモ

ロ 同纖維腫ノ海綿狀
静脈ニ色料ヲ注入
セシモノ

ハ 腹部ノ皮膚ニ生セ
シ纖維腫ノ静脈ニ
色料ヲ注入セシモ
ノ右圖ハ真物ニ比
スレハ其大サ六十倍



ナヒ且ツ之ヲ割切スル
モ尿管收縮スルヲ得ス
シテ其断口著シク開口
スルヲ常トス是レ即チ
纖維腫ヨリ生スル出血
ハ多クハ多量ニシテ且

ツ術ヲ要セサレハ停止スルヲナキ所以ニシテ
右ニ述ル解剖的及器械的ノ作用ニ基クモノナ
リ而シテ尿管著シク開口シテ收縮スル性以テ
キモノニアリテハトロシク造ル極メテ

困難ナリトス其他時トシテ大ナル子宮纖維腫
及ヒ骨膜纖維腫ニ空隙ヲ造リ其内ニ稀薄ナル
液ヲ充ツル者アリ是蓋シ新生セル淋巴質
ノ病性ニ擴張セルナラン又スペンセル、ウェル氏
ノ實驗ニ據レハ大ナル子宮纖維腫ニ於テハ液
ヲ充ツル頭大ノ腔洞ヲ其中ニ發見スル
アリト云

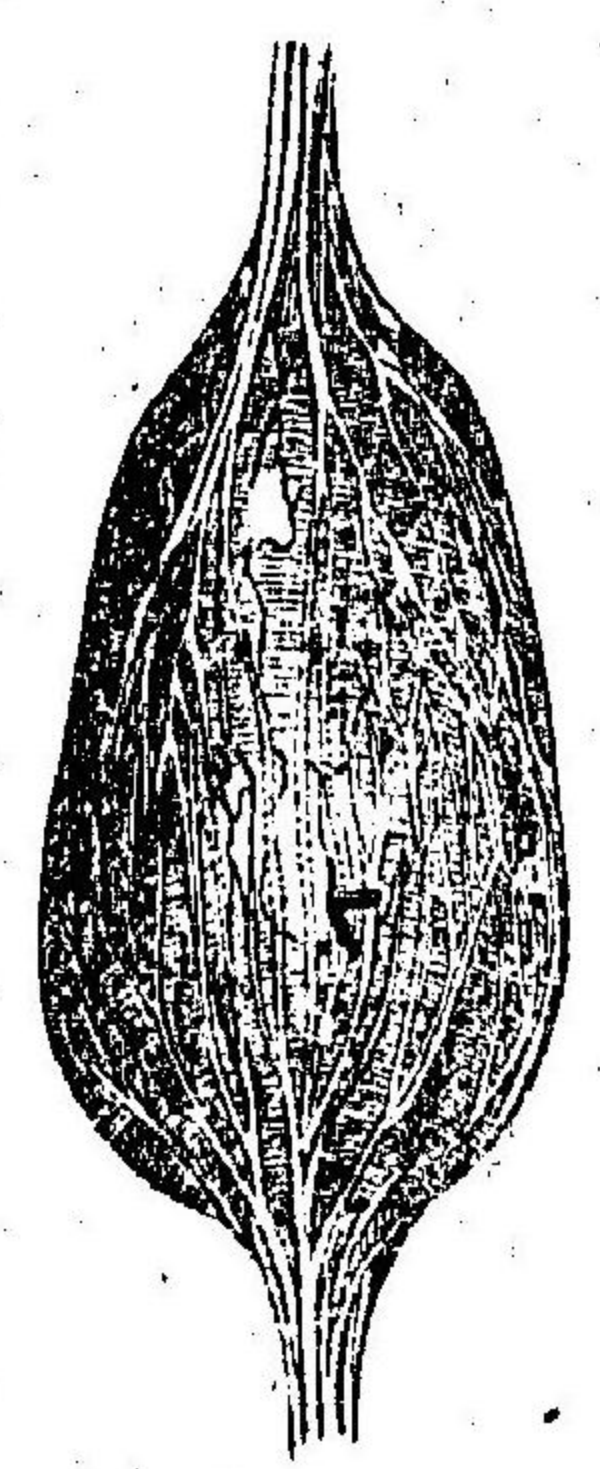
纖維腫ヲ發シ易キ局部多シト雖就中子宮ニ生
スルヲ居多ナリトスヘシ殊ニ筋性纖維腫該部ニ生ス
ル者ハ常ニ甚シク増大シ或ハ石灰ニ化スル

少ナカラス而シテ其形通常圓クシテ著シク其
周圍組織ヨリ分堺セラル殊ニ子宮體ニ生スル
ヲ常トス頸ニ生スルハ稀ナリ子宮唇ニ生スル
トナシトス其發生スル方向ハ上方或ハ下方ニ
向フ即チ上方ニ向フトキハ腹腔内ニアリテ漸
々腹膜ヲ擴張シ或ハ下方ニ向フハ遂ニ腔内
ニ見ハル、トアリ然ルキハ莖ヲ具ヘテ延長シ
而シテ著シキ出血ヲ生スルトアリ此ノ如キ纖
維腫ヲ纖維性子宮ポリープト云
纖維腫ハ骨膜ヨリ生スルト多シ而シテ每常纖

維性肉腫ナリ詳言スレハ纖維胞及ヒ紡績胞ヨ
 リ構成セラル但シ紡績胞ヲ多シトスロキタン
之ヲ纖維性頭蓋骨及顔面骨ノ骨膜ニハ纖維腫
肉腫ト云ヲ生スルヲ多シ殊ニ蝴蝶骨ノ下面ニ多發ス而
 シテ該部ヨリホリトシテ性贅腫トナリテ後鼻孔
 ヨリ前ニ向ツテ鼻孔内ニ竄入シ且ツ咽喉中ニ
 蔓延ス所謂纖維性該腫漸々増大スルトキハ
 壓迫ニ由テ之ニ近接スル組織吸收消亡セラレ
 甚シキハ頭蓋骨内或ハハイモル洞中ニ竄入ス
 ルヲアリ該腫ハ海面狀ヲ成シタル静脈ニ富ム

モノナリ又纖維腫ハ脛骨及ヒ鎖骨ノ骨膜ニ生
 シ易シ加之骨ニ生スルヲアリ例之上顎骨ニ之
 ヲ生スルヲ以ナカラ

第七十四圖



神經性纖維腫

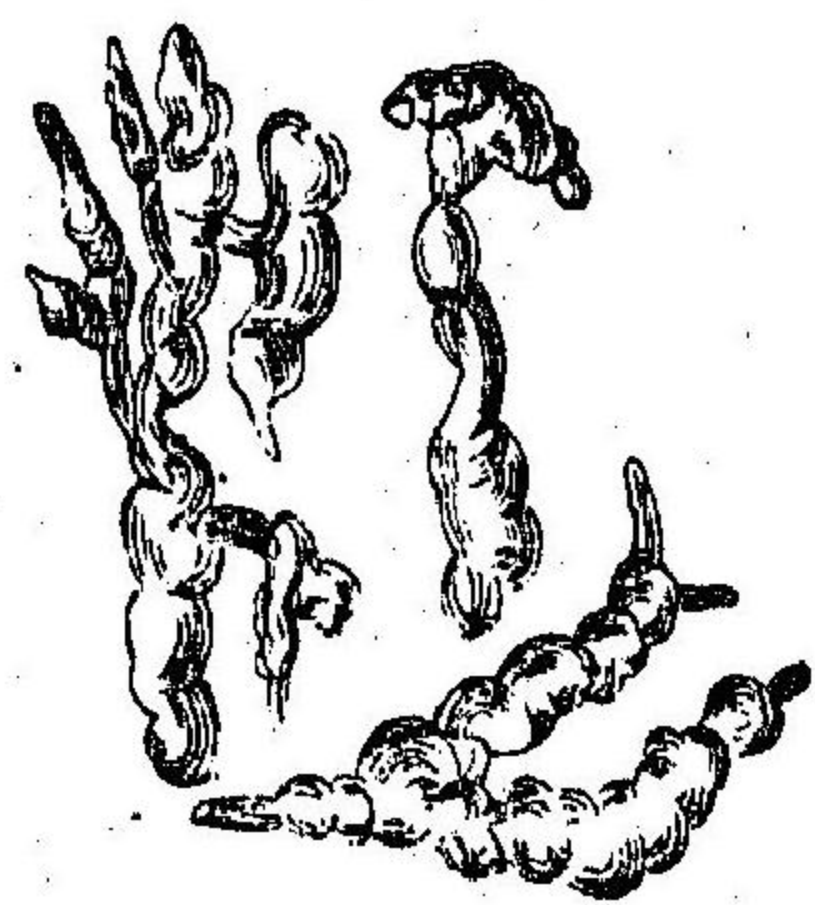
ホリシ氏ノ實驗ニ
 係ル

ノ細大ヲ撰ハス神經
 幹ニ生スルヲ以ナカ
 ラス總テ此ノ如ク神
 經ニ生スル新生物ヲ
 神經腫ト名クル者アリト雖解剖上ニ就テ之ヲ
 論スレハ自ラ之ト別アリトス此ニ論スルモノ

ハ神經幹ニ生スル纖維腫即チ纖維性肉腫ナルモノナリ真ノ神經腫ナルモノハ其一部或ハ全ク新生セル神經纖維ヨリ構成セラル、モノナリ真性神經腫夫レ神經纖維腫ハ多ク神經幹ヲ傳フテ之ヲ生シ而シテ其形結節ヲ成スモノナリ而シ

第七十五圖

一男児ノ眼脰ニ生セシ結節狀ノ纖維兼肉腫性神經腫其大サ真物ニ同シ



談腫ノ性質及ヒ切断面等ハ之ヲ七十一圖ニ示スモノト一樣ナルモノナリ纖維腫ハ皮下蜂窩織ニ生スルヲ太ク稀ナリ而シテ乳腺ヲ除クノ外ハ腺ニハ纖維腫ヲ生スルヲ絶ヘテナシトス纖維腫ノ發生ハ殊ニ中年ノ者ニ多シトス妙年ノ者ニハ少ナシ又高年ノ者ニハ妙年ノ者ヨリ稀ナリトス只纖維性神經腫及ヒ骨纖維腫骨膜纖維腫ハ妙年ノ者ニ發スルヲ少ナカラス然レモ小兒ニ發スルハ極メテ稀ナリ多クハ可婚期ノ後ニ於テス總テ纖維腫ハ男子ニ比スレハ女

子ニ多シ而シテ子宮纖維腫ハ三十五乃至四十
五ノ年紀ニ生ス但シ同時ニ數多ヲ生スルヲ常
トス骨膜纖維腫ハ同時ニ數多ヲ生セス然レモ
剔出後年ヲ經ルトキハ再發スルヲアリ其性ガ
ニ類總テ纖維腫ハ其中心ヨリ發育スルモノナ
似スリ而シテ傳播ノ性ヲ具ヘサルヲ常トス然レモ
時トシテ傳播性ナルモノアリ此ノ如ク纖維腫
同局部ニ數箇生スルトキハ互ニ連着シ遂ニ近
接スル周圍ノ組織ヲ浸淫シテ漸次増大シ之ニ
隣接スル筋骨水脈腺等ニ纖維性變質ヲ及ホス

モノナリ此ノ如キ傳播性ノモノハ纖維性肉腫
ナリ而シテ真ノ肉腫ノ如ク肺ニ轉移スルノ性
ヲ具フルモノトス纖維性神經腫ハ同時ニ數多
發生スルヲ多シ故ニ同時ニ二十ヨリ三十箇ヲ
生スルモノアリ而シテ同シ神經ノ區域ニ生ス
ルヲ常トス

單純ノ纖維腫ハ總テ其發育慢除ナリ又老人ニ
アリテハ時トシテ其發育ヲ廢止スルヲアリ殊
ニ子宮纖維腫ノ如キニアリテハ月經廢止ノ時
期ニ於テ著シク其發育ヲ廢シ而シテ石灰ニ化

スルモノナリ其外他ノ贅腫殊ニザルコロマト
併發スルコト少ナカラス此ノ如キモノニアリテ
ハ原發セシ贅腫ハ即チ著シク纖維ノ性質ヲ具
フト雖剔出後再發シ或ハ他部ニ傳播シテ第二
ノ贅腫ヲ生スルコトアリ該腫ヲ精シク検査スル
トハ細胞多キザルコロマト一様ナルヲ證明ス
ヘシ

鑑定ハ右ニ述フル諸症ヲ参考スルキハ困難ナ
ルモノニアラストス即チ贅腫ノ性質即チ硬軟等發
生シ易キ局部年齢近接スル組織ト合着スル粗

容及ヒ形狀等ヲ詳カニセハ鑑識ヲ誤マルコトナ
カルヘシ

療法剔出術ノ外他ニ療法ナシ平常刀ヲ以テ之
ヲ割除スヘシト雖莖ヲ具ヘ或ハ延長セシ結組
織腫及ヒ纖維性ポリープ等ニアリテハ他ノ療
法ヲ要セサル可カラス即チ往時ハ此ノ如キ症
ニ結紮術ヲ施コセリ即チ一線系ヲ以テ緊シク
贅腫ノ莖ヲ結紮シ以テ血液ノ運行ヲ阻絶シ贅
腫ヲシテ壞死ニ陥ラシメ結紮部ヨリ脱落セシ
ムル目的ナリ此療法ハ殊ニ刀ヲ用フルニ由テ

切面ヨリ出血ノ恐アル者ニ施コスナリ然レモ
 輓近ニ至リテハ却テ効少ナク害多キ以テ之ヲ
 施ス者稀ナリ殊ニ鼻腔及ヒ咽喉内ニアリテハ
 結紮ヲ施ス_一大ニ困難ナリ之ニ用フル器械諸
 般ナリト雖此ニ述フルモ益ナケレハ贅セス抑
 有莖ノ贅腫ヲ除去スルニ出血ノ恐ナキヲ要ス
 ルニハ輓近其器械及ヒ法方ヲ大ニ一新セリ殊
 ニホロオルホルム_一ヲ發明セシ以來其術普子ク
 諸方ニ傳播シテ各人ノ知ル所ト為ルニ至レリ
 其新法方トハ何ソヤ即チ括斷及ヒ燒斷術是ナ

リ總テ挫創ハ出血スル_一ナク或ハ出血スルモ
 吝少ナルノ理ヲ推シテ「シヤセンヤク」氏ハ器械
 ニ由テ贅腫ヲ括斷スル_一ヲ發明セリ即チ該器
 械ヲエクラセウル_一ト云鑷狀ヲナシタル鐵條ナ
 リ此器械ニ由テ莖ヲ具フル贅腫ヲ徐々ニ括約
 スルトキハ括斷后創面ニ一滴ノ血ヲ見サルハ
 シ加之其大サ撓骨動脈ノ如キモ出血スル_一ナ
 シ而シテ其創面平滑ニシテ創縁銳利ナリ且ツ
 創面ニハ著シキ壞死ノ狀ヲ呈セス良性ノ肉芽
 ニ由テ治癒スル_一ヲ常トス器械ノ功能及其裝置
 既ニ之ヲ頌天堂醫

事雜誌第二卷ニ詳右ノ療法ニ亞クモノヲ「ミツテ」
記セリ合考スヘシルドルフ氏ノ電氣燒灼法トナス即チ「ガルハニ」
ニ由テ白金線ニ電氣ヲ通セシメ通紅スルニ至
リテ贅腫ヲ切除セントスル部ニ於テ括約シ之
ヲ燒切スルナリ出血ハ甚タ稀ニシテ「エクラセ」
ウルノ功用ト一樣ナリ且ツ同時ニ止血術トモ
ナルモノナリ只談器械ハ其裝置複雑ニシテ且
ツ之ヲ購求スル容易ナラサルヲ以テ病院ヲ除
クノ外ハ各醫之ヲ左右ニ供スヘキノ品ニアラ
サルヲ以テ之ヲ「エクラセウル」ニ比スレハ試用

スルモノ大ニ少ナキヲ覺ユ亦理ナキニアラス
纖維腫ノ莖ヲ具ヘサルモノ或ハ深在スル者ニ
アリテハ時トシテ外科術ヲ施シ難キヲアリ又
纖維腫ノ發生部及ヒ其大小等ヲ察シテ生命ヲ
損害スル恐レナキ者ニアリテ手術稍患者ノ生
命ニ害ヲ及ホスヘキヲ疑フトキハ先ツ談腫ノ
發育慢徐ナルカ將々老年ニ至リテ其發育機ヲ
廢スルカヲ明察セサル可カラズ必ス輕々手術
ヲ施コスニ急ナルト勿レ其他最初ヨリ手術ヲ
施コシ得ヘク或ハ施コサル可カラサル者甚

夕多シ殊ニ潰瘍ニ陥キリシ部ヨリ著シク反復
 シ来リ或ハ骨ニ危険ノ損害ヲ及ホシ或ハ頭蓋
 腔ニ竄入セシトスル景况アル纖維腫ニアリテ
 ハ初メヨリ手術ヲ施コシ危急ヲ救ハサル可カ
 ラサルナリ又纖維性神經腫ハ時トシテ劇シキ
 疼痛ヲ發シ患者之ニ堪カク加之遂ニ麻痺ヲ
 生シ筋ノ作用ヲ障碍スルニ至ルヲ以テ此ノ如
 キモノニハ神經ノ患部ヲ截除セサル可カラサ
 ルナリ然レモ疼痛ナキ者ニ手術ヲ施スハ益ナ
 シ

乙 脂肪腫

人ノ素質ニ脂肪ヲ産出シ易キ一種ノ素質アリ
 然レモ之ヲシテ病性ノ素質トナスニ及ハズ却
 テ體中脂肪ヲ多ク産スルハ是レ給養ノ宜キヲ
 得ルノ一兆トナスヘキナリ抑モ健康躰ニ於テ
 脂肪ヲ最モ多ク産出シ易キ年齢ハ槩子三十ヨ
 リ五十ノ間ニシテ幼稚ノ輩ニハ稀ナリトス總
 テ脂肪ヲ産出シ易キハ右ニ述フルカ如ク人ノ
 年期ニ係ハルヲアルヘシト雖常ニ暖衣飽食ニ
 テ筋骨ヲ勞役セス且ツ所謂粘液質ナル者大ニ

脂肪ノ産出ヲ助クルニ似タリ若シ脂肪ヲ産出
 スルト非常ニシテ之カ為ニ一局部或ハ全身ノ
 作用ヲ妨クル時之ニ疾病ノ名ヲ下スヘシ或ハ
 軀中何ノ部ヲ撰ハス一小部ニ限局シテ脂肪ヲ
 堆積スルキハ即チ之ヲ脂肪瘤ト名ケ一ノ疾病
 トナサ、ルヲ得サルナリ

脂肪瘤ヲ組織解剖上ニ就テ論スルキハ其構造
 甚タ單一ニシテ皮下蜂窩織ノ脂肪組織ト異ナ
 ル所ナレ即チ結組織ノ網狀ヲ成シタル網眼中
 ニ脂肪ヲ充實ス故ニ脂肪ハ結組織ニ由テ各區

ニ分劃セララル、モノナリ但網狀ヲ成セル結組
 織ノ發生ニ多少アリ其發生多キモノハ脂肪瘤
 ノ質堅靱ナリ若シ其發生僅少ナルモノハ其質
 柔軟綿ノ如シトス是ヲ以テ甲種ヲ纖維性脂肪
 瘤乙種ヲ單脂肪瘤ト名ツク

脂肪瘤ノ外形ハ通常圓ロシ且ツ手ヲ以テ之ヲ
 壓按スレハ脂肪ハ結組織ニ由テ區分セララル、
 カ故ニ辨ヲ成スヲ覺ユル者ナリ而シテ其周圍
 ハ悉ク結組織ニ由テ其隣接スル組織ヨリ分界
 セラル故ニ截除スルニ當リテ剝離シ易シ或ハ

脂肪ノ發生濶大ニシテ他ノ迄接スル組織ト正
シク區劃シ難キヲアリ

脂肪瘤ヲ發生スル部局ハ多クハ皮下蜂窩織
リ而シテ軀幹ニ生スルヲ最モ多シトス。臍鞘ニ
ハ非常ニ脂肪ヲ集積スルヲアリト雖極メテ稀
ナリトス

脂肪瘤ノ發生ハ甚ク緩慢ナリ而シテ其發生中
疼痛ナキヲ常トス。神經ヲ壓シ或ハ裂損セ
シムルトキハ例外ナリ
其大小一ナラスト雖極メテ腫太スルノ性ヲ具
フ而シテ瘤ヲ被フ所ノ皮膚ハ瘤ノ腫大スルニ

從テ緊張ス時トシテ褐色ニ變スルヲアリ而シ
テ皮膚ハ瘤ト固着セシテ動移スルヲ常トス
脂肪瘤ハ或ハ他ノ腫物ト合併シ發ス例之ハ柔
軟ナル纖維腫粘液性ガルコーム及ヒ水脈線腫
又時トシテ其中ニ海綿性靜脈腫ヲ併發スルヲ
アリ

脂肪瘤ヲ發生シ易キ躰質ハ右ニ述ヘシ如ク總
テ脂肪ヲ産出シ易キ性質及年齡ニ多シトス而
シテ之ヲ發シ易キ部局ハ腹脊頭顔トナスヘシ
四肢ニ生スルハ稀ナリ又同時ニ數多ノ脂肪瘤

ヲ各處ニ生スルヲアリ脂肪瘤發生ノ誘因トナルヘキモノハ局處ノ壓迫摩擦或ハ遺傳ニ由ルモノアリ然レモ多クハ發生ノ源ヲ知ル可カラサルモノナリ

鑑定ハ大ニ易シ先ツ之ヲ按摸スレハ其質多クハ柔軟ナリ且ツ強ク指頭ニテ壓スレハ脂肪ノ結組織ニ由テ各區ニ分割セラレテ辨狀ヲナスヲ皮下ニ知覺スヘシ又一種ノ摩軋ヲ覺フヘシ其他發生ノ緩慢ナルト患者ノ年齢若クハ發生スル部局等ヲ參考スルキハ多クハ診決シ得ヘ

キモノナリ然レモ時トシテ柔軟ナル纖維腫ナルコトハ海綿性血管腫等ト誤マリ易キヲアリ

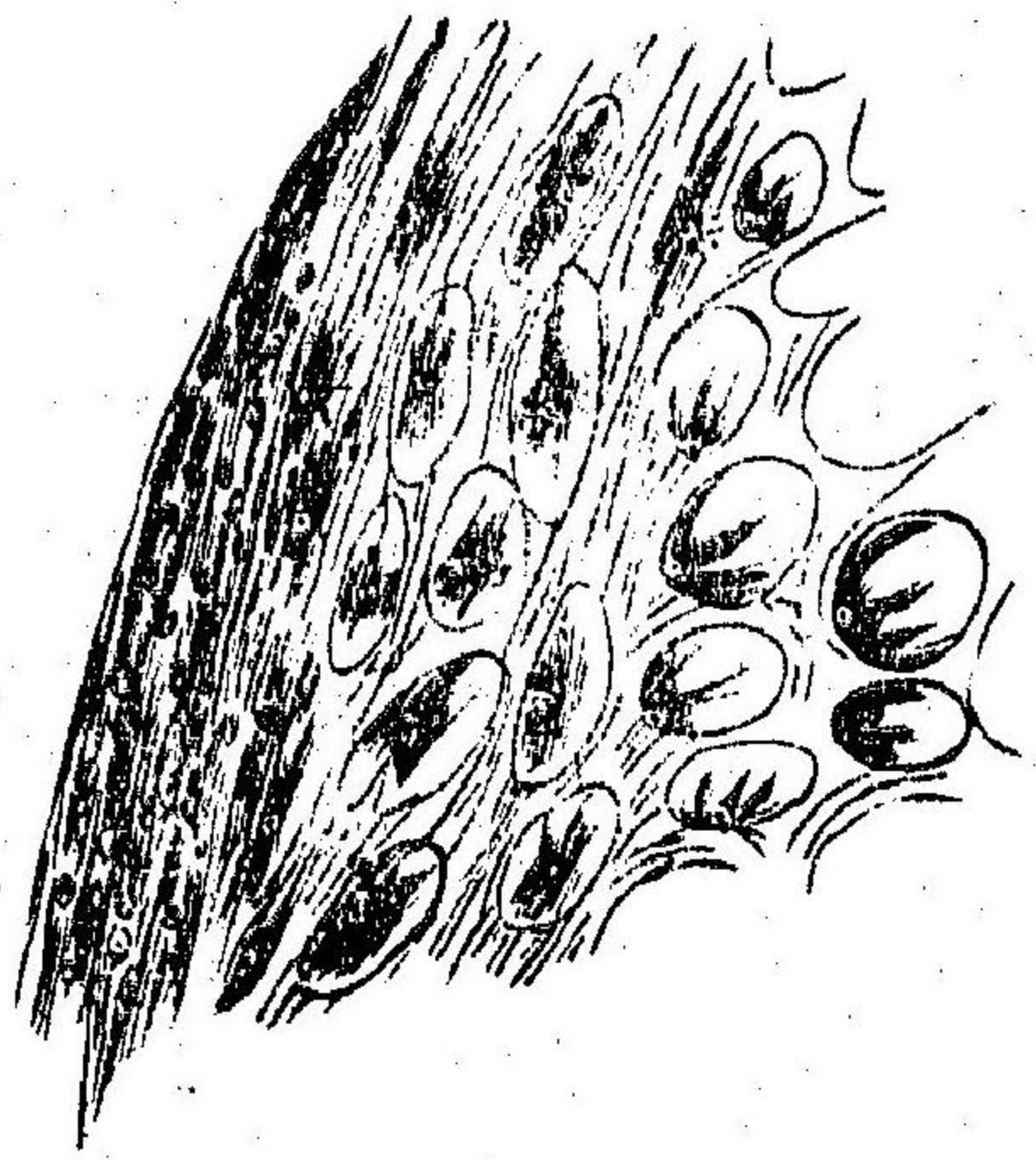
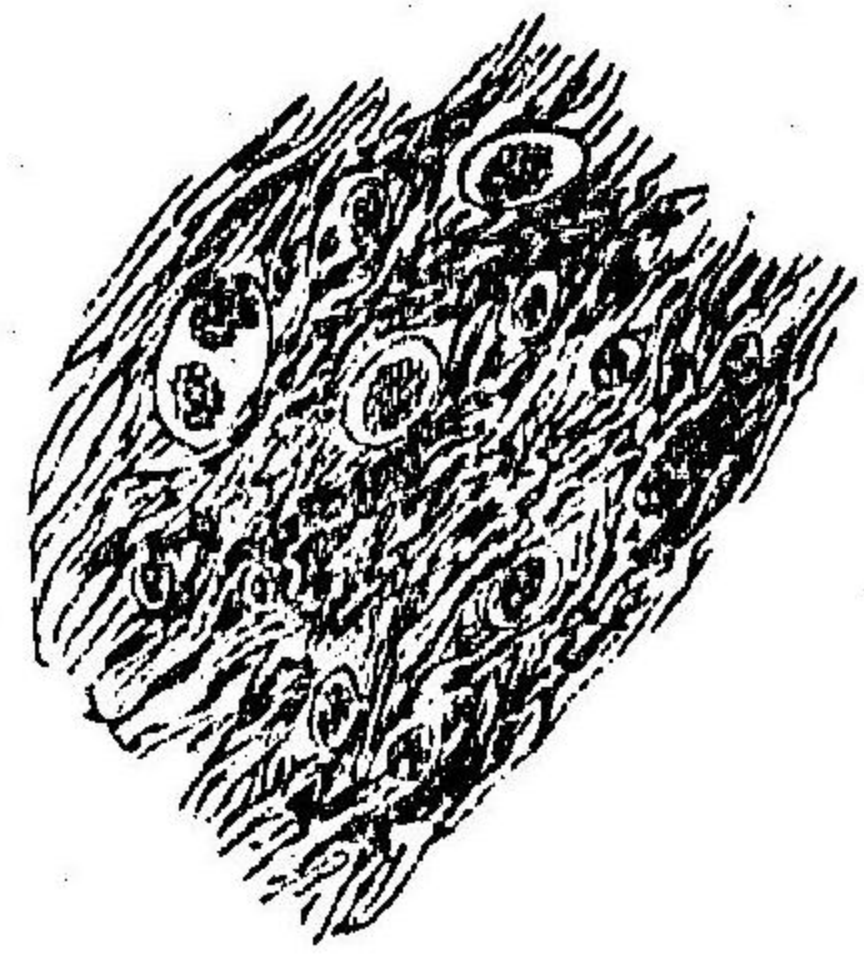
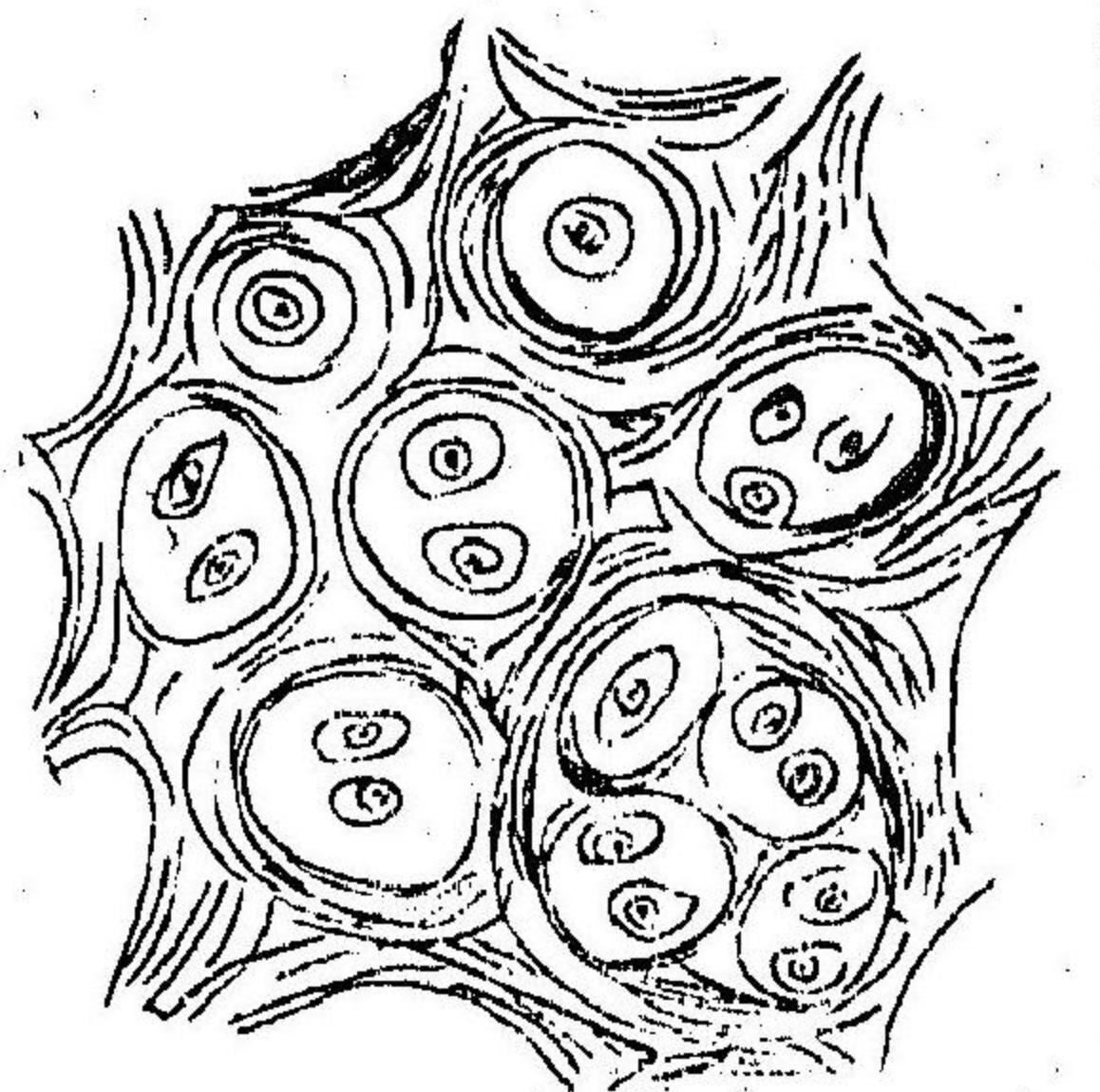
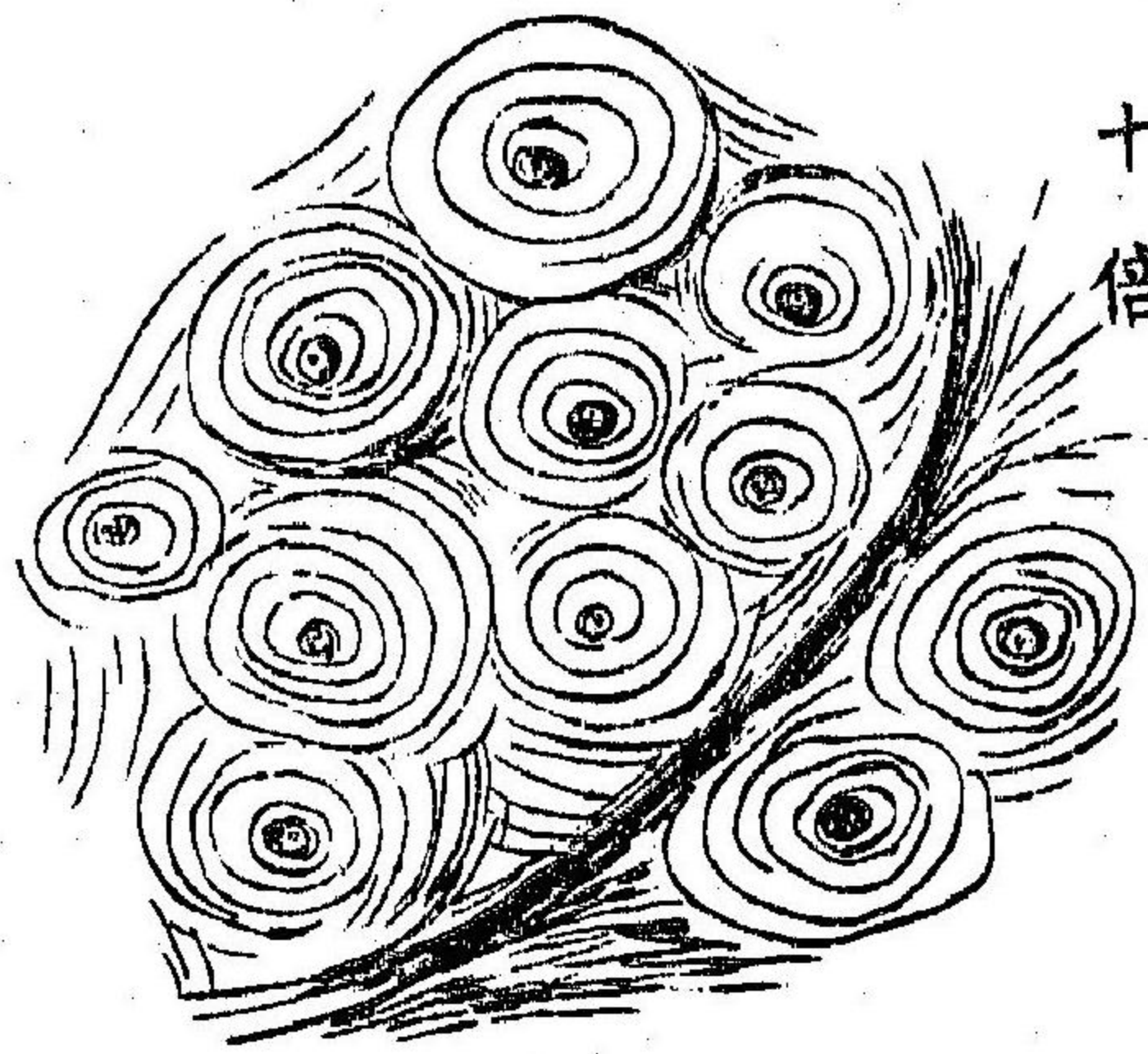
療法 ハ截除スルノ外術ナシ豫後ハ大抵善良ナリ是他ナシ瘤ノ良性ナルニアラスレテ患者ノ躰質多クハ善良ナルニ由ル者ナリ

丙 軟骨腫

軟骨腫ハ即チ軟骨ヨリ構成セララル、者ニシテ二種アリ一ハ硝子様軟骨一ハ纖維性軟骨ヨリ構成セララル、者是ナリ抑モ病性新生物ナル軟骨即チ軟骨腫ヲ顯微鏡ニテ検査スルトキハ其

第七十六圖

人及ヒ犬ニ生セル軟
骨腫ノ組織ヲ示ス真
物ニ比スレハ三百五
十倍



ニアリテハ硝子様胞間質ハ健全軟骨ノ胞間質
ノ如ク無色透明ノ質ヲ具フルハ甚タ稀ナリ而
シテ平常細胞間ニ見ハル、硝子様質即チ胞間質ハ

細胞ノ形狀一樣ナラス
時トシテ甚タ美彩ニシ
テ圓形ノ軟骨胞ヲ見ル
此細胞ハ胎兒ノ關節軟
骨或ハ助軟骨ニ見ル所
ノ者ニ同シ但少シク小
ナルノニ而シテ軟骨腫

微細ノ纖維ニ化スルモノナリ是レ軟骨腫ヲ切
割シテ顯微鏡ニ照スルハ結組織質ハ「カッセル」
ノ如ク細胞ヲ包圍シ或ハ其間ヲ縱横ニ經維ス
ルヲ見ル所以ナリ又肉眼ニ由テ之ヲ見ルハ
只網狀ヲ成スヲ見ルヘシ軟骨腫組織ノ健全ノ
軟骨組織ニ異ナル所ハ胞間質ノ纖維組織中多
クハ血管ヲ新生スル是ナリ健全軟骨ハ之ニ反
シテ血管ヲ具ヘサルモノナリ其他顯微鏡検査
ニ據ルニ軟骨腫組織ノ健全軟骨組織ニ異ナル
者多シ即軟骨腫ノ胞間質硝子ナルト纖維性ナ

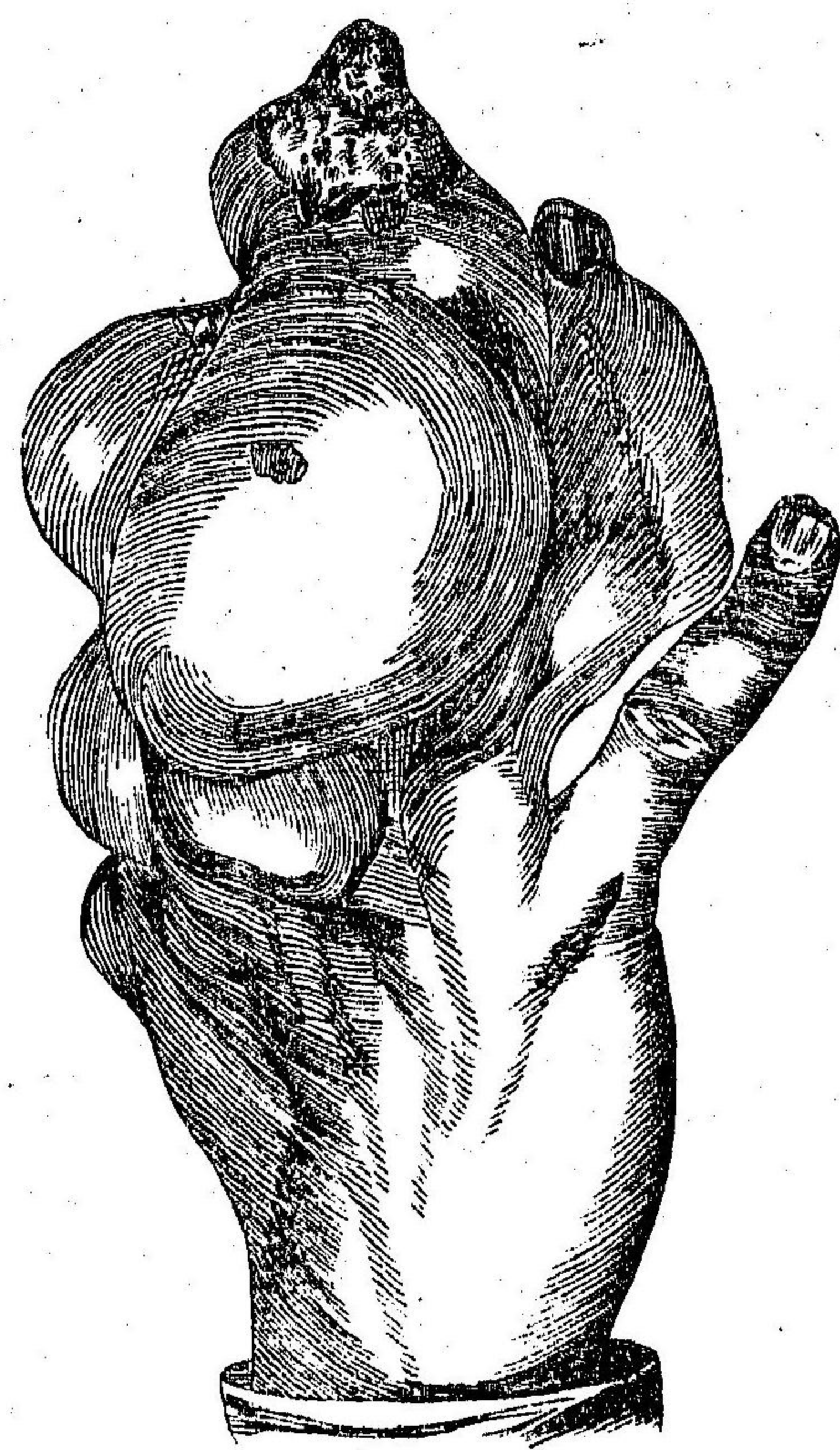
ルトニ拘ハラヌ時トシテ軟骨平常ノ堅靱ナル
質ヲ失ナヒテ粘膠質或ハ破碎シ易キ質ニ變ス
ル者アリ又時トシテ軟骨ノ石灰變質或ハ真ノ
化骨ヲ生スルト少ナカラス而シテ軟骨細胞ノ
形狀ニ至リテハ甚タ諸般ナルモノナリトス
軟骨腫ノ外形ハ平常圓形ニシテ結節狀ヲナシ
正シク分塚アルモノナリ而シテ時トシテ大人
頭大ニ増大スルトアリ其發育スルヤ最初ハ中
心ヨリ漸次外ニ向ツテ増大スト雖時トシテ經
過スルニ從ヒ之ニ近接スル周圍ノ組織同病ニ

罹リ即チ軟骨ニ變シ以テ周圍ヨリ増大スル
 アリ而シテ經過中諸般ノ解剖的變質ヲ蒙フル
 モノアリ例之ハ糜粥様或ハ粘膠様變質或ハ化
 骨等是ナリ軟骨腫ニ粘膠様變質ヲ生スルハ
 其中ニ粘液性囊腫ヲ造リ之ニ由テ最初硬固ナ
 リシモノ變シテ柔軟トナリ且ツ波動アルヲ覺
 フルニ至ルモノナリ又軟骨腫化骨シテ其發育
 機ヲ廢止スルヲアリ然レモ稀有ノ者ニ屬ス其
 他大ナル軟骨腫ニアリテハ時トシテ表面ニ潰
 瘍ヲ生スルヲアリ殊ニ腫上ノ皮膚緊張スルキ

ニ生シ易シ外傷或ハ他ノ外来刺戟之カ源トナ
 ルヲアリ又中心ニ軟化ヲ生シ外部ニ向テ破開
 スルヲアリ
 軟骨腫ヲ生シ易キ組織ヲ論スルハ其最モ多
 ク發生シ易キモノヲ骨トナス可シ殊ニ指骨及
 ヒ腕前骨トナス足ニアリテハ此ノ如キ骨ニ生
 スルヲ稀ナリ手ニアリテハ軟骨腫ハ同時ニ多
 生スルヲ常トス加之時トシテ全指之ニ罹ラサ
 ル者ナキニ至ルヲアリ手ニ亞ク者ヲ大腿骨及
 腕骨トス此部ニ於テハ非常ニ増大スルモノニ

第七十七圖

指ニ生セシ軟骨腫



レテ全ク骨質ヲ變セシムルニ至ル顔面骨或ハ
頭蓋骨ニハ之ヲ生スルコト大ニ稀ナリ而シテ肩
胛骨及肋骨ニアリテハ發生スルコト稍多シトス
腱鞘ニハ之ヲ生スルコト甚タ稀ナリ其他軟組織
殊ニ腺例之睪丸卵巢乳腺唾腺ニ生スルモノナ
リ而シテ時トシテ十全發育セシ單純ノ軟骨ヲ
發見スルコトアリ或ハ時トシテサルコトム若ク
ハ癌中ノ各所ニ軟骨ヲ發見スルコトアリ
年紀ヲ以テ論スレハ軟骨腫ハ少壯ノ者ニ生シ
易シ殊ニ可婚期ニ少シク先タチテ生ス童子ニ

ハ生スルヲ稀ナリ而シテ軟骨腫ハ衝突打撲等ノ外傷ニ由テ發スルヲアリ其發生スルヤ非常ニ慢徐ナルモノトス故ニ二十乃至三十年ノ久シキヲ經過スルモノナリ而シテ時々其發育ヲ廢シテ増大セサルヲアリ又時トシテ其發育大ニ速ニシテ且ツ傳播性ヲ具フルモノアリ例之一箇ノ軟骨瘤「エンボリ」作用ニ由テ之ヲ肺ニ轉移シ患者ヲ死ニ陥キラシムルヲナキニアラズ「ホウベル」氏ハ一種軟骨腫ヲ生シ易キ素質アリテ之ヲ遺傳スル者アルヲ實驗セリ右ニ述フ

ルカ如ク軟骨腫ニ肉腫或ハ癌ヲ合併シ生スルトキハ即チ豫後ハ平常軟骨腫ノ如ク善良ナルモノニアラス
 鑑定及ヒ豫後ハ右ニ論スル諸症ヲ參考スルトキハ曉リ易シ往時ハ軟骨腫ノ軟化セシモノ或ハ囊腫様ニ變化セシ者ニ粘膠性潰瘍粘膠性癌及蜂窩状癌ノ名ヲ命シタリ如何トナレハ纖維腫軟骨腫「カルコーム」及ヒ腺腫腺癌中ニ存スル内皮胞或ハ結組織ハ粘膠様ニ變質スルヲ多キヲ以テナリ故ニ其本性ノアル所ヲ詳カニセン

ニハ顯微鏡検査ニ據リ或ハ變質ノ性状等ヲ明
カニシ以テ之ヲ鑑識セサル可カラス然ルハ
往時人ノ名命セル者ノ穩安ナラサルヲ證スル
ニ足ルヘシ

療法

施術ノ為メ危険ヲ招ク恐ナキモノニア
リテハ切除術ヲ施コスノ外他ニ術ナシ抑モ髓
骨ニ大ナル軟骨腫ヲ生スル者ノ如キハ固ヨリ
術ヲ施コシ得ヘキモノニアラサル論ヲ俟タス
又大腿ニ大ナル軟骨腫ヲ生スルカ如キモ亦股
關節ヨリ離斷セサルヲ得サルヲ以テ危険トナ

スヘシ指ニ生スル軟骨腫ヲ以テ最モ手術ヲ施
コスヲ多シトス是啻疼痛ナキノミナラス指ニ
生スルハ患者之カ為ニ著ク其運營ヲ障碍ス
レハナリ指ニ手術ヲ施コスニハ腫上ノ皮膚ヲ
縱割シ然ル後鉤ニテ創縁ヲ披キ刀或ハ鋸ヲ用
キテ之ヲ截除ス但シ腱ヲ側方ニ轉移シ毀傷セ
サラシムルヲ要ス然レモ多クハ贅腫ト共ニ之
ヲ生スル骨ヲ截除セサルヲ得サル者ナリ又軟
骨腫骨ノ髓管ヨリ發育スルモノニアリテハ固
ヨリ其部ヲ全ク截除スルニアラサレハ十全ナ

ラス此ノ如キ症ニアリテハ時トシテ腱鞘ニ劇
炎ヲ起シ之ニ由テ指ニ強剛ヲ遺ス_トアリ_テギツヘ
ンバツク_ク氏ノ實驗ニ據レハ手術ノ際軟骨ノ殘餘
物アルモ漸々化骨シテ發育セスシテ治スルモ
ノナリトス然レ_レ未夕之ヲ證明スヘキ實驗ナ
シ右ニ論スル所ヲ以テスレハ手術ヲ施シ之ニ
由テ効ヲ奏シ得ヘキ者ハ只軟骨腫ノ小ナル者
ナリ如何トナレハ甚ク増大セル者ニアリテハ
己ム_トヲ得ス每常指ノ關節離斷術ヲ施コサ、
ル可_トラサレハナリ 外科通論卷之二十終

東京第四大區四小區
湯島五丁目十三番地

出版人 佐藤尚中

右同所

送人 佐藤進

發兌書林

馬喰町三丁目五番地

鳥村利助

